

ロゴセラピーの人間学と人間諸科学の基礎づけ

安 井 猛*

The Anthropology in Logotherapy and the Groundwork for Disciplines of the Humanities

Takeshi Yasui

How can the Department for Psychology and the Humanities be innovated now and in the future? The author of this article tries to answer this question and proposes to introduce the anthropology in Logotherapy and Existential Analysis into the disciplines of the Humanities: biblical hermeneutics, Christian anthropology, science of religion, modern Japanese history as well as bioethics and thanatology.

Key Words : spiritual dimension, freedom and responsibility, self-transcendence, behavioral modification

はじめに — 問題への接近

同一の教員が複数の分野の異なった科目を教える場合、彼あるいは彼女はそれらの科目が相互にどう関係しあうかを問わざるを得ない。異なった分野の雑多な知識を伝達するだけでは十分ではない。この論文の著者はこの意味で彼の担当する複数の科目相互の諸関係とそれらの共通基盤を素描したいと思い、ウィーン第3学派の心理療法、ヴィクトール・フランクル（1905～1997）のロゴセラピーにおける人間学を使うことにした。

この療法の特徴と効能は手短に纏めると以下のようなだろう。

- 1 人間はその本質からして価値と意味に方向づけられる。
- 2 意味ある人生を送る意志は人間の実存にとって中心的な動機である。
- 3 意味への意志の欲求不満は一連の障害へ通ずる。
- 4 ロゴセラピーは目標を意識した面接により自分自身の人生の中に意味を発見するよう助ける — いろいろな困難にも拘らず。
- 5 そしてそれは多くの他の障害にあっても助けを提供する。

欧米であれ、日本であれ、ロゴセラピーの訓練および研究所そしてロゴセラピー学会の資料によると、この5行の中にロゴセラピーの特色と効能は纏められているとあってよい。

ヨルク・リーマイヤーはロゴセラピー&実存分析のためのドイツ協会の学問的顧問だが、彼によると意味への問いは哲学と同じくらい古く、大部分それと同一であり、それに対して「人生の意味」という表現は本質的にいて19世紀になって初めて現れるという。「人生の意味(目的、価値)について語る多くの者たちの間でここではただ2, 3の名を上げておこう。シェー

2010年4月10日受理

* 尚綱学院大学 教授

クスピア（先駆者）、カント、ショーペンハウエル、フィヒテ、キルケゴール、ルートヴィヒ・フォイエルバッハ、フリードリッヒ・シュレーゲル、ノヴァーリス、トルストイ、ディルタイ、R. オイケン、ウィリアム・ジェームス、カーライル、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルス、ヘルマン・ヘッセ、サーンテグジュペリ、など。』¹⁾ このような哲学者、心理学者、文学者、社会学者、経済学者たちは人生の意味を問題にした。彼らの力の蓄積が20世紀にも受け継がれ、フランクルはその力に押されてロゴセラピーを開発したと思われる。それは孤立した個別的現象ではなかった。ロゴセラピーとその基礎理論としての実存分析は『医師による精神の教導』（1946年）²⁾ が戦後暫くして日本に紹介され以来知られ始め、今日、フランクルのほとんどすべての著作は接近可能である。人間諸科学の専従が彼らの担当科目相互の関係とその共通基盤を問う場合、フランクルのロゴセラピーと実存分析を参照することには文献的観点からも無理はない。フランクルの生誕100年と没後10年記念として出された彼の人間学の文献も多数あり、この論文の筆者の目論見を支える人間学の概略は益々明らかになった。第1部でそれを素描し³⁾、第2部ではこの概略に出てくる思想を駆使しながら、ロゴセラピーと実存分析がこの論文の著者の担当する人間諸科学科目相互の関連を理解するための基礎的視座を提供することを示そう。

第1部 ログセラピーの人間学の素描

1 ログセラピーの人間像

ロゴセラピーの人間像を描写する手掛かりの基礎的な文献はフランクルの「次元存在論」と「人格への10のテーゼ」⁴⁾ である。これらの中に描かれる人間像はそれ自身、療法的力となっている。フランクルは心理療法の中にほとんど心理的戦術、戦略あるいは技術を盛り込まなかった。彼は患者のその都度の問題に合わせ、即興で患者を治したという。フランクルはこのような治療原理としての人間像を「次元存在論」と名づけた。それによると身体的、心的そして精神的という3つの次元は人間存在において結びつく。身体的次元には人間の細胞組織、器官およびその機能が属する。心的次元には人間の感情、思考、認知そして社会的領域が数えられる。これらの次元により人間の身体的-心的平面（die psychophysische Ebene）が成立するが、それは身体的方面においては生理的反射の閉ざされたシステムであり、心理的方面においては心理的反応の閉ざされたシステムである。

フランクルによると、さらに人間存在には精神的次元も属しており、それはそれ自身で存在し、他の2つの次元から導き出されない。それは人間存在そのものを特記する特殊人間的次元である。人間の実存はフランクルによると、身体次元と心的次元と精神的次元の統一と全体である。いっそう高い次元はいっそう低い次元を自らの内に含む。心の存在は身体を、人間的精神の自己表現は身体と心を必要とする。身体的有機体は植物、動物そして人間に同じように備わる。感情と思考過程と社会的絡み合い心は、単純な程度において人間に類似な仕方でも動物にも見出される。それに対して精神的な契機は専ら人間において出合う。人間における精神的なものの働きは、ヨルク・リーマイヤーによると、つぎのような能力である。事柄への、および芸術への興味、創造性、宗教性そして倫理的感性（良心）、職業倫理、審美的感動、自由な決断、愛、自己距離化、自己超越、反抗力、自由、責任、態度、価値および意味による方向づけ、希望、世界への開けなどである。⁵⁾ フランクルは精神的なものの働きを広く捉えたことにより、

ロゴセラピーを学際的な研究の対象とした。このことはこの論文の著者の要件を追及するために都合がよい。

ロゴセラピーは上述のような人間の精神的諸能力を認識し、それを促進することに重点を置いた。患者は心理的な傷を回復するため彼あるいは彼女の精神的な諸能力を活性化し、それを使うよう促される。これは一般に心理療法の歴史における「絶対に新しいこと」と看做されている。このような人間理解はそれぞれ快楽への意志を、あるいは権力への意志を心理療法の中心に据えたフロイトにも、アドラーにも見られなかった。

2 精神の能力を発見する

フランクは精神の諸能力のうち心理的健康を維持することに貢献するものとして「自己距離化」と「自己超越」の能力を挙げ、それらを「基礎人間学的原現象」と名づけた。精神の他の諸能力はこの原現象に貢献する限りにおいて意義を保持すると考えられる。

人間はフランクによると衝動を持ち、衝動から何ものかを作る。しかし、衝動は人間を所有しない。むしろ反対に人間は衝動に対する自由を所有し、それを肯定することができる。彼には動物と違って自己に関わらないこと、自我的でないもの、人間から独立して存在するものにも注意を向け、それを眺める能力が属する。彼は自分自身の立場の外に足場を作る。そこから彼は自分自身を振り返る。フランクはこれを自己距離化と名づけるが、その能力のお陰で人間は内面的に自分から離れること、自分自身へ距離をとりながら巧みに自分を導けるようになる。そこから自己自身の事柄が新しい光のもとに現れる。

人間はまた周りの、そして外の世界を眺めやることができる。フランクはこれを自己超越と呼んだ。それによって人間は彼自身への関心を抑え、彼を待つ課題に自分を捧げ、あるいは彼を必要とする他の人間たちのために存在することができる。自己超越の能力はフランクによると、人間を心理的成長へ解放する。自分の感情の苛立ちから距離をとり、それによって引き回されず、自分の弱さを気にしないで世の中の、そして人生の意味と課題と目標、それゆえにまた仲間の人間の存在へ向かって行動する者は強くなる。

人間の実存のこの自己超越はロゴセラピーの中心概念である。フランクは彼の著作のいたるところで自己超越を称揚する。カール・ハインツ・ビラーは『ヴィクトール E・フランクのロゴセラピーと実存分析辞典』の中にフランクの自己超越に関する言葉を集めているが、そのなかの1つをここに引用しよう。

「人間の実存はいつも自分自身を超えてなにものかを志向する。このなにものかは再び自分自身ではない。人間を満たすある意味、果たさなければならぬ人生の課題、あるいは彼が出会う人間の存在である。そして人間がそのように自分自身を超越する程度において、彼は自己自身をも実現する。事柄へ仕えることによって、あるいは他の人格を愛することによって自己を実現する。別言すると、人間がまったき人間になるのは本来ただ彼がある事柄へとまったく解消する、ある他の人間にまったく献身するところだけで可能である。そして彼がまったく彼自身になるのは、彼が彼自身を見過ごし、そして彼自身を忘れるところで出来事となる」⁶⁾と。

この論文の著者はこのテキストの中から、とりわけ自己超越と自己実現の関係についてのフランクの考えを取り出そう。彼によると、自己超越の完成の程度が高くなればなるほど、それに対応して自己実現の完成の程度、従って幸福度も高くなる。自己超越の能力が発揮されて始めて、そしてそれに基づいて自己実現が可能になるのであって、その逆ではない。この原因

と結果を転倒させてはならないというのがフランクルの考え方である。彼はアメリカにおける人間性心理学の代表者たちと論争した際、彼の関心はまず彼らの自己実現概念が最初で最後のものではないことを彼らに明らかにすることだった。例えばアブラハム・H・マスローがフランクルのロゴセラピーをマスローの自己実現の理解の中に取り込もうとしたとき、フランクルは執拗に抵抗し、自己実現がただ人生の課題の充足、あるいは他者との出会いという道を通ってのみ可能になるとした。それは自己超越の予期しない結果として理解されるべきであり、その逆ではないと主張した。⁷⁾

フランクルはさらに「精神の反抗力」という言葉を作った。誰にも子供時代から現状に逆らって何事かを貫徹した経験があるだろう。ある1つの立場をとり、その正しさを疑わず、動じない。現状に負けてたまるかと思ひ、無制約的な自由を発揮する。これは心や身体能力ではなくて精神の質である。精神は心身のその都度の知覚および状態を圧倒する力を持ち、それに立場をとり、それを超える。そのお陰で人間は欲求にも衝動にも運命にも負けない。逆にそれらから自らを解放することができる。ただ、人間が病にかかり、身体が幾重にも弱められる場合は例外であって、精神の反抗力はもはやふさわしく表現されることはできない。

困難な制約のもとで、一見最高度の不自由にあつて人間はつねになお彼の行動、体験あるいは少なくとも彼の態度を決定する可能性を保持する。フランクルは彼の強制収容所の体験記の中で書く、「強制収容所では人は人間からすべてを奪うことができた。ただ与えられた状況に何らかの態度をとる最後の自由は奪うことはできなかった」⁸⁾と。

人間はフランクルによると苦難に満ちた状況にあつても、それに応じて態度を変容させながらそれを乗り越えることができる。これは強制収容所での生活に当てはまるだけではない。人間は一般に、心配、不安、悲しみ、弱さの中に放置されること、ある事態に巻き込まれることに対し精神の全力をこめて反抗することができる。精神の反抗力が活性化されると、不治の病もその刺を失う。全くの困窮状態の中でも人間は態度変容によってそれに逆らい、それを乗り越えることができる。精神そのものは重い心理的身体的制限にあつても病に罹ることはない。

フランクルによると、うえに描写された自己距離化、自己超越及び精神の反抗力は無制約的に使えるわけではない。それらは人間が人生に価値と内容を与える一層深い意味、人生の「何のため」を知る時だけ全開する。「無意味性」の空虚さのなかでは萎縮する。

3 意味の探求と世界像

それでは、意味とは何か？ルーカス、リーマイヤーそしてラスコフは異口同音にこの問いはフランクルにおいて必然的に世界像と結びつくことを指摘している。なぜなら意味とは彼によると、人間がただ単に主観的に願うに値するとか、欲したいとか、目的にかなっていると見なすものではなく、それは客観的によいという質を持たなければならない。人間がその中にある世界そのものが無限の意味を含み、それを人間に提供しているのでなければならない。ロゴセラピーの世界像によると全被造物は意味に満ちている。生命は無制約的な意味を持ち、それは人間の特別な状況に応じて特別な意味の機会を提供する。これは客観的な事実であり、人間はフランクルによると意味を捉えるために「意味への意志」を吹き込まれている。彼は意味を感知する器官としての良心を持ち、それがその都度の彼の意味を彼の環境の中に見つけ、それを満たす。フランクルによると、人間に固有な意味の探求と努力があるという事実はすでに彼の憧れに先立って本当に意味が存在することを証明する。あたかも渇きが水の存在を、目が光の現存を含

むかのように。世界が人間に自らを意味あるものとして開示することと人間が意味を意志することとは同じ出来事の2つの極なのである。

この فرانクルの楽観主義はルーカスによるともちろん、本当は除去できる不都合な事情とあまりに早く折り合いをつけるという態度とは何のかかわりもない。フランクルのいう意味はまったく反対に、具体的人格が変えることができる困難はすべて変えるようにとの呼びかけである。意味はその都度「必要なもの」、「困窮を転ずるもの」のことである。

さらにまたフランクルは態度を変えることによってだけ実現される意味があって、それを通して人間は世界に繋がると考えた。フランクルはいう、死に至る病がある。改善できない不正、恐ろしい不幸な事例あるいは小さな人間が変えることのできない政治的構造がある。フランクルはこれらすべてのことにもかかわらず、人生はその意味を失わないことを確信できるとした。人間は避けがたい苦悩からさえなお、どのようにそれを耐えるか、耐えるよう工夫するかによって1つの意味を引き出せる。行動のためのいかなる余地もないが故に、行動がやむ。そここのところで態度することが始まる。害悪を除去する可能性が尽きたところ、そこで尊厳に満ちた仕方での害悪を担うことが出てくる。これはフランクルによると、何かができること、何かを体験することよりも高貴な「行為」である。彼のロゴセラピーは受動性へ刺激するのではなく、それはむしろ覚悟させる。そして覚悟することはひとつの行為である。個々人がその責任を能動的に果たすなら、そのときパニックと世界没落気分の場所はない。なぜなら、ルーカスによると瞬間の満たされた意味から存在の、その都度次の瞬間のための力が放射するからである。ロゴセラピー的知恵は世の中の多くの苦痛を減少させるのみならず、変更不可能なことが存在するところでは、それに直面する人間そのものを変えることができる。変更不可能なことに直面して人間は自己の態度を変えることによって、そうしなければ超えられない状況を超えることができるようになる。このことも意味実現の1つの形、否、創造する価値、体験する価値よりもっと深い形、態度する価値の充足による意味の実現である。この意味の実現を通して世界は究極的には意味に満ち溢れることを確認できる。

以上、この論文の著者はフランクルにおける人間像、人間の精神的次元を特徴づける働きとしての自己距離化と自己超越、そしてフランクルにおける意味と世界像を素描した。素描された人間学は古典的なロゴセラピーのそれであり、それはフランクル没後におけるロゴセラピーの発展においても維持されている。

第2部 ロゴセラピーの人間学と人間諸科学

この論文の著者はここでロゴセラピーの人間学が著者の担当する人間諸科学科目、「聖書学入門」「キリスト教人間論」「宗教学」「日本近代史とキリスト教」そして「死生（ホスピス）論」をどのように基礎づけ得るかを論ずる。彼の関心はここでこれら諸科目のシラバスを書くことではなく、ロゴセラピーのシステムを利用しながらそれぞれの科目の基礎部分をどのように構築できるか、それを構成する諸要素はどのようなものであり、どのように諸科目を貫き、相互の整合性を保つのかを示すことの中にある。学生がこの論文の著者から上記5つの科目を受けた場合、それらの科目はそれらの対象において複数であるにもかかわらず、学生の中で1つの統合された全体像を結ぶことはできるだろうか？これを確認することである。

4 ログセラピーと聖書学入門

この科目の担当者は学生の理解力の範囲内で聖書のメッセージを取り次ぐ。担当者は一定の仕方で聖書のテキストを解釈することを要求される。聖書のテキスト解釈に関して、ハイデルベルクの聖書学者、M・エーミッヒ⁹⁾は、その方法は17種類に上ることを指摘している。歴史批評的、社会史的、歴史的心理学的、そして新考古学的解釈。言語学的、新しい文献批評／物語的、正典的、そして言葉の出来事からする解釈。作用史的、深層心理学的、シンボルに方向づけられた、ビブリオドラマからする、解放神学的、フェミニズム的解釈。教理学的、原理主義的、実存主義的解釈。これらの解釈はエーミッヒによると「聖書の著者たちと彼らの複数の世界」に定位した方法、そしてそれぞれ「複数のテキストとその複数の世界」、「複数の読者と彼らの世界」、「事柄とその世界」とに定位した方法という4つのカテゴリーに分類される。エーミッヒは最後の分類に属するルードルフ・ブルトマンによって提唱された「実存主義的解釈」を評価する。ブルトマンは聖書の根本思想を解釈するため、実存哲学者、M・ハイデッガーの諸概念を使った。「罪の中の存在」という聖書的ないい回しは「世界の自明の設計と『ひと(man)の独裁』」のこと、「罪の果実」という言葉は「死の経験」のこと。人間の現存在が時間的であり、消え去るものであるという困窮からの救いへの問いが緊急なものとなる。ブルトマンはこの死への転落からの救いと本来性への突破を人間にただ信仰においてだけ与えられ得る「神の行為」と理解した。ブルトマンによるとすべての聖書のテキストは人間的現存在のこの根本構造を映すものであり、テキストはその根本要素としての人間の現存在理解へ向けて読まれなくてはならない。

エーミッヒが深層心理学的解釈も挙げているのをすでに見た。深層心理学的解釈とは主としてフロイト的精神分析とユングの深層心理学からする聖書解釈のことである。ヨーロッパ文化圏において心理療法を開発する者は事実上不可避免的にそれがキリスト教思想あるいは信仰とどのような関係に立つか明らかにしなければならない。フロイトとユングもそうしたのであり、彼らの弟子たちの中には聖書を精神分析的あるいは深層心理学的に解釈する者たちがいる。フランクフルはフロイトとアドラーに接触したあと、マックス・シェーラーとニコライ・ハルトマンの価値哲学そしてパスカルとキルケゴールに始まる近現代の実存主義の影響のもとでログセラピーを基礎づけた。彼が後期ハイデッガー、ヤスパース、ガブリエル・マルセルなどの実存哲学者たちと対話し、彼らへの近さを意識したことは周知のことである。その限り、フランクフルのログセラピー的観点から聖書のテキストを理解しようとするなら、人はそれを聖書の実存主義的解釈と呼んでよいだろう。しかし、それは上に言及されたブルトマンの実存主義的解釈とは異なる。例えば、アメリカのパシフィック神学校の聖書学教授、ロバート C・レスリーは『イエスとログセラピー』¹⁰⁾という書の中でログセラピーと実存分析のすべての構成要素が聖書のテキストの中に含まれることを示した。この本のなかで扱われる聖書のテキストはすべてフランクフルのログセラピーの諸構成要素へ対応するという。レスリーはログセラピーの11の構成要素を挙げた。それらはブルトマンの聖書解釈学の構成要素にとって異質である。

荒野の誘惑（ルカ4章1節～13節） → 高層心理学の探求

孤独なザカイ（ルカ19章1節～10節） → 人間の精神の反抗力の動員

富める青年（マルコ10章17節～22節） → ライフワークの発見

サマリヤの女（ヨハネ福音4章4節～22節） → 実存的空虚の克服

- 中風の若者（マルコ 2 章 2 節～ 12 節） → 価値の矛盾の解決
パリサイ人シモン（ルカ 7 章 36 節～ 50 節） → 責任の遂行による自己実現
ペテロの告白（マタイ 16 章 13 節～ 19 節） → 創造価値の実現
2 人の女性・マリアとマルタ（ルカ 10 章 38 節～ 42 節） → 経験価値の実現
ベテスダの池の病人（ヨハネ福 5 章 2 節～ 15 節） → 態度価値の実現
悪霊につかれたゲラサの男（マルコ 5 章 1 節～ 20 節） → 人間の尊厳性の回復
仕えるイエス（ヨハネ福 13 章 3 節～ 5 節） → 人間の自由の行使

このようにレスリーはまた 4 つの福音書の使信のなかにフランクルのロゴセラピーと実存分析がその多面性と統一において見出されるとした。彼はフランクルの「高層心理学」という用語を使いながら聖書の使信がフロイトやユングの「深層心理学」では理解できないことを示唆した。フランクルは人間における無意識の存在を否定しない、否、2 人の先達同様にそれを肯定する。ただ、無意識の内容は基本的には意味の探求および発見として理解される限りでの宗教性であるとした。精神的なものの働きの根底は無意識であり、しかも自由で責任を問われる活動である。フランクルによるとさらにフロイトの無意識は性と死への衝動欲求に満ちており、ユングの無意識は人類の精神史の中に現れた知恵に満ちているといっても、それはいまだ一種の衝動と理解されている。最後に、フランクルによると精神の働きは心身の働きの上位にあって、その指導原理として働く。フランクルはそれ故、ロゴセラピーと実存分析を「高層心理学」と呼んだ。このようにして人はレスリーのロゴセラピー／実存分析に基づく聖書解釈を実存主義的高層心理学的聖書解釈と名づけることができよう。この聖書解釈をブルトマンの聖書の実存主義的解釈と比較すると、前者は精神的なものの働きの豊かさ全体を押さえ、それを個々の側面へ分析する努力である。後者は人間の実存をあまりにも図式的一般的に説明する傾向にある。もちろん実存主義的高層心理学的な聖書解釈のこれからの課題は、それがどの程度新約聖書の他の使信に、そしてまた旧約聖書に適用可能かを確認することである。これを留保しているなら、人はロゴセラピーによる聖書解釈の方法を 18 番目の解釈の方法として承認できるといえるだろう。

5 ロゴセラピーとキリスト教人間論

どのように心理学の学生にキリスト教人間論を講ずるか？レスリーによると、人間イエスの聖務の秘訣は、彼が神との親密な関わりを知っていたことの中にあった。イエスはこの関わりの中に生きつつ、彼の生命の意味を追求し、それを仲間としての人間に仕えることの中に見出した。共存し、共生する人間に仕えることが彼の自由であり、責任であることを証した。このようなイエス解釈はフランクルのそれに接続するといつてよい。

ロゴセラピーは人間における精神的なものを覚醒して心理的生活の回復を目指すことを課題とする。それは一定の状況の中にある人間の、一定の意味の探求と発見に関わる。ロゴセラピーは人生そのものの、そして世界そのものの意味の発見を中心的テーマとするわけでない。それはキリスト教の伝統的な人間論的教説、すなわち被造物としての人間、罪の中における人間、神の和解の業の中における人間、究極の目標に到達し解放された人間についてのドグマを反復するわけではない。そうではなくて、ロゴセラピーは生きる意味を追求した 1 人の人間イエスの意義の理解に関わる。イエスはただの人であり、彼はすべての人間が彼と同じようになり得

る可能性を持つ限りでの人間として議論の対象となる。この意味でイエスは人間としての根源的な規定を歴史の中で充足した。すべての他の人間も彼が行ったことと同等なことを為し得、彼が語ったことと同等なことを語り得、彼が担った重荷と同等の重荷を担い得る。 فرانクルにとってはただの人イエスという実存の模範的性格を追求することが問題だった。フランクルはロゴセラピーの神学化を望まなかった。彼はただ彼の負わされた宿命との関係においてイエスのイメージを新鮮に保ち、彼を語った。

フランクルが1942年から1945年にかけてナチス・ドイツの強制収容所を体験したことは周知だが、彼は体験記の中で書く、「私たちは、おそらくこれまでのどの時代の人間も知らなかった『人間』を知った。では、この人間とは何者か？人間とは、人間とは何者かを常に決定する存在だ。人間とは、ガス室を発明した存在だ。しかし同時に、ガス室に入っても毅然として祈りを口にする存在でもあるのだ」¹¹⁾と。フランクルの人間論は「ガス室を発明した存在」と「ガス室に入っても毅然として祈りの言葉を口にする存在」、すなわち「まともな人間」と「まともではない人間」という2種類の人間がいることの確認に他ならなかった。この2種類の人間の区別はフランクルにとって決定的だった。そして誰かがいずれの種類の人間になるかはどこまでも自由な選択、各人の責任の問題だと考えた。ある者は悪に向けて、あるものが善に向けて作られていることはあり得ない。フランクルは「あらゆる人間には善と悪を分かち亀裂が走っている」という。また、ある人間が善を選ぶか、悪を選ぶかは彼の属する集団が全体としてどのような決断を下すかということからは引きだせない。フランクルは集団的罪責という考えを否定した。彼にとって、「人間らしい善意は誰にでもあり、全体として断罪される可能性の高い集団にも、善意ある人はいる。」彼はこのような考えを、ナチスによるユダヤ人のジェノサイドの試みを記念する式典およびその他の機会を使って語り続けた。つまり、犠牲を払った民族の1員であるとしても、彼は「ユダヤ主義」に組できないとした。フランクルは同朋の輿論を買い、迫害を受けることがあったが、それを耐えることによって本当の和解を指し示すことができるとした。ただの人イエスはこのような意味で「ガス室に入っても毅然として祈りを口にする存在」を代表する者だった。フランクルにとって、イエスはこの観点において人類のための意義を有する。¹²⁾

E・ルーカスは「教授様、あなたはなにをを考えておいでですか？」というK.-H.フランケンシュタインによるフランクルへのインタビューに注意を向けた。2人の話題は強制収容所体験に及んだ。フランクルはそこでいう、「(ガス室に入っても毅然として祈りの言葉を口にする人々は)絶対のゼロ点の上に、すべての人間性の底の上に到達した。そこで人間は百パーセント人間となった、まさに彼の困窮と無力において、彼の拒絶において、彼の悲惨において、彼のウジ虫存在において彼は人間になった」¹³⁾と。「人間性の底」すなわち人間性の「ゼロ点」において人間は人間になったと。十字架の上で息絶える瞬間、神に向かって「なぜ私をお見捨てになるのですか？」といったイエスのように！イエスはそこで彼の人間存在を実現したと！フランクルはいう、「…この瞬間においてイエスは完全な人間になった。そして完全に人間になったので、彼は彼の神性を確証した。それ故、人はいえよう、イエスは百パーセント人間になったので、彼を神といい表すことが正当なのだ」と。フランクルはこのようにイエスがギリギリの限界のところまで人間性を充足した故に、彼の神性を確証したというキリスト論を代表している。人間性がゼロ点に至るところに人間性の完成点があり、神性があるというキリスト論を問題にしている。

このインタビューの10年後、フランクはユダヤ教学者、ピンチャス・ラピーデとの対話においてもこのキリスト論を話題にした。そこでラピーデはイエスの最後の言葉として伝承された「なぜ私をお見捨てになるのですか？」という言葉にコメントしている。¹⁴⁾ この引用の中の「なぜ」はヘブライ語では「どのような目的のために」となっていることを指摘している。原語は従って十字架上に遺棄されるイエスの絶望ではなく、彼のある問いを指示しているという。彼は自分の死には意味があるのだけれども、その意味がいまだに不明であることに関して、それが「どのような目的のために」起こるのかと問うていると。それ故に、ここではイエスが死の、従ってまた彼の生の意味を探求したことが問題になっているのだと。従って、ラピーデはイエスの最後の言葉をフランクの意味で解釈できると、すなわちこの問いにおいてイエスの態度変容のプロセスが暗示されているのだという。

ここまでこの論文の著者はキリスト教人間論を論ずるべき箇所でもキリスト論にこだわった。それはキリスト論がキリスト教神学の中心問題を成すからである。従来の教義は、人間イエスから人間性を奪い、彼を直ちに三位一体の神の、第二格である神のみ子あるいは先在の神の言葉、ロゴスと同一視する傾向があった。なるほど、従来の教義もこの神の御子の罪の世界への徹底的な自己卑下と、異郷における御子の父なる神への従順を語った。しかし、それはどこまでも父なる神と子なる神の間の、神性内部での出来事として解釈された。これに対して、イエスの歴史は神性に触れてはいるが、どこまでも神性の外にある有限な人間の歴史、自由で責任的な選択による歴史として演じられたという理解の仕方はほとんどなかった。しかしまさにこのような理解をフランクとラピーデは代表しているのである。彼らは、それ以外のイエス解釈はイエスの苦難の意味を汲み尽くしてはいないといいたいのである。フランクとラピーデによると、キリスト教神学の正統主義はユダヤ人イエスの歴史的人間性を捨象し、彼を直ちに三位一体の神の第二格、すなわちロゴスないしは永遠の神の御子と直接的無差別的に同一視した。キリスト教神学者たちの一部はこのようなキリスト論に躓いて、神の御子キリストの名によって六百万人のイエスの同胞を殺すことに加担するイデオロギーを作った。イエスを高め過ぎて人間を知らない神の御子にしてしまった。その神の御子が人間を裁いた。このようにしてこの論文の著者は、アウシュヴィッツ以後のキリスト教人間論はイスラエルから出たただの人イエスをその元来の姿に戻す作業から始まらなければならないと考える。そのことによって万人にとっての模範としてイエスを描く。この描写が成功すると、それ自身がキリスト教人間論、すなわち誰でも原則的にはそれであり、それに成れる「真（まこと）の人」に関する教説となる。

6 ロゴセラピーと宗教学

ウィーン出身のユダヤ系アメリカ人、ピーター・ドラッカー（1909～2005）はマネジメントや経済や社会を論じたが、宗教学を教えたこともあった。「私は大学で宗教学を講じていたことがある。神学のたぐいは教えなかった。蠅は3万5000種いるが、神学者のいうことが本当であるならば蠅は1種類でなければならないことになる。正しい蠅以外の者がいるはずがないからである。実際には神は多様をめでる。事実、人間ほど多様な生き物はいない。私自身面白くない人に会ったことがない。いかに順応的で保守的であろうと、自分のしていること、知っていること、興味を持つことについて話始めるや否や、誰もが魅力的になる。その時、誰もが個となる」¹⁵⁾ これはドラッカーらしい明晰な文章だが、彼はその中に宗教に関して重要と思

うことを全部納めたように思われる。彼の神学批判、宗教多元論の肯定、多元論の前提として個の重要さの強調などである。各人が固有の精神的な道を選び、それを歩む。生きる意味を探求する中で人は様々な形の宗教に出会う。ドラッカーによると、人間が個別化の過程を辿る中でその人の宗教は民主化し、多元化する。それは宗教の本質に属する。この論文の著者も宗教学者としても個人としても宗教多元論の立場を採る。いまも新鮮に思い出すのだが、30年ほど前、彼はマインツ大学に提出した学位論文「キリストと仏陀」で神学部教授たちを苛立たせたことがあった。宗教とは意味の探求および発見のことなのだから、それを通して人間は個別化および差異化を遂げる。ある人間にとって答えであるものが他に人間には答えではない可能性がある。究極的なことについての多様な道が同時に存在することを理解するなら、人は自らを複数の道へ開くことはできる。この論文の筆者はキリストと仏陀が1つの人格に統合されることは可能か?と問い、「可能だ」と答えたのである。当時、このような立場はドイツの神学部においては一般的ではなかったけれども、今日ではすこしづつ知られ始めている。この論文の著者はその後もかの地でキリスト教と東洋の諸宗教の対話を促進するために隔月誌『言葉と沈黙と』を発行し続けたが、その中の1996年と1997年分が2003年以来マールブルク大学の神学部において教科書として採用されている。これは神学におけるひとつの進歩をあらわすものとして望ましいことではあろう。フランクもまた苦悩の問題を考える中で仏教へ接近していることは注目に値すると思われる。

このようにしてこの論文の著者はアメリカのノンフィクション作家、スタッズ・ターケルの『円環は破れるか? 死と再生と信仰への飢えについての省察』(翻訳は『死について』)を宗教学に導入している。この本の中には63名の異なった職業と経歴を持つ人々のエッセイを収録されている。元消防士、元警察官、心臓外科医、元看護師、元医師、救急救命士、元ギャング、刑事、元死刑免罪者、放射線医、撮影監督、原爆被爆者、ヴェトナム戦争退役軍人、母親、牧師、神父、ラビ、クレーン・オペレーター、建設会社経営、弁護士、デベロップメント・ディレクター、フォークシンガー、元ジャーナリスト、元公民権運動家、歌手、HIV感染者、食糧銀行運営、ケースワーカー、元司書、空手教室経営、女優、コメディアン、画家・詩人、文筆業、元教師、父親、葬儀屋、孫など。彼らは異口同音に生きながら死を考え、死を考えながら生きることを考えている。このプロセスの中で生と死の全体を支えるものを飢え渴者のように求めている。死と、再生と、信頼できる何者かへの渴き! 無神論、不可知論、自然主義者たちを含め多くの人々が宗教の核心およびその形を理解しようとする。その際、彼らは自明のごとく宗教的元論の立場をとる。そしてまた言及された教科書のほとんどすべての頁のなかにロゴセラピーの諸要素が顔を覗かせている。自分の生を引き受けること、自己から距離を保ち、それを超え、世界へ自己を開くこと。精神の反抗力を動員し、変えることのできない状況は自分を変えることによって超えられること、等々。

例えば、被爆体験を克服しようとする中で、気がついてみるといつの間にかアメリカで看護師として働いていたヒデコ・タムラ・スタイナーは「被爆者は、恐ろしい死と恐ろしい生を耐えねばならなかった」といい、歌手で、もう1つのエッセイの著者は「つらさを抱えたまま生きていけばいいのよ」¹⁶⁾という。この「耐えねば」といい「つらさを抱えたまま」ということはフランクの態度価値に通ずる。「究極の正直と孤独におけるこの対話、これは祈りなのだが、そこには普通いう意味での希望はない。そうではなくてすべての希望すること、あるいは希望しないこととは関係のない人生の究極の意味性への信頼の維持だけがあるのだ」¹⁷⁾ あらゆる期

待を超えて「人生の究極の意味への信頼を維持する」というフランクルの言葉が問題である。彼が人間性の底辺の「ゼロ点」において神性が現れるといったことは紹介済みだが、上の「耐えねば」とか「つらさを抱えたまま」とはこの「ゼロ点」における信頼のことである。これが宗教の原点である。その展望である。

人はさまざまな仕方で宗教学を扱うことができよう。日本の宗教史から古典的な、例えば、仏教の改革運動のピークをなす鎌倉時代の聖者たち、親鸞や日蓮や道元などから重要と思われるテキストを解説する。宗教を文化史的現象として捉え、政体の変化とともに固有な仕方で変化する宗教の心と形を捉える。原始時代の宗教、奈良時代の宗教、平安時代の宗教、鎌倉時代の宗教、室町時代の宗教、江戸時代の宗教、東京時代の宗教といったように。また現代の新宗教、あるいは新新宗教の現状に焦点を当て、なぜ若者たちは既成教団ではなく、手作りの若い教団を選ぶのか？既成宗教はなぜ若者に届かないのか？何が家の宗教を捨てることへ彼らを駆り立てるのか？家族関係の心理学、教団のそれはどんなものだったのか？いずれにしても、上記のターケルの教科書からの引用とそのロゴセラピー的解釈はこれらの宗教学あるいは宗教心理学的課題を突き詰めることに役に立つだろう。

7 ロゴセラピーと「日本近代史とキリスト教」

この論文の著者はこの科目のため内村鑑三の『代表的日本人』¹⁸⁾と新渡戸稲造の『武士道』¹⁹⁾を採用している。両者は明治期の知識人キリスト教徒として日本の精神的伝統を世界へ向けて発信し、日本人が欧米の勢力に抗し、あるいは影響されながら新しい国家を形成できることを証明しようと試みた。言及された本は戦後の復興期から今日に至るまで経済の指導者たちにも読まれ続けている。内村は5人の代表的日本人の筆頭として西郷隆盛を置いた。新渡戸は武士道が道徳体系として新しい時代の指導原理であるべきだとした。彼によると武士道の淵源は仏教、特に禅、神道、孔子と孟子、そして王陽明の知行合一の思想の中にある。内村も新渡戸も王陽明の著述の中に新約聖書との類似点が多いことを指摘した。王陽明のほとんど何れのページにも「まず神の国と神の義とを求めよ、さらばすべてこれらの物は汝らに加えられるべし」という聖書の言葉が鳴り響くのを聞いた。

西郷隆盛は内村によると陽明学の「敬天愛人」の中に彼の人生観を要約した。それは「まさに知の最高極地であり、反対の無知は自己愛である」。西郷の「天」は内村によると「全能であり、不変であり、きわめて慈悲深い存在であり、「天」の法は、だれもの護るべき、堅固にしてきわめて恵みゆたかなもの」だった。内村は西郷の「天はあらゆる人を同一に愛する。ゆえに我々も自分を愛するように人を愛さなければならない」という言葉を好んだ。天の愛を基として人間相互の愛の戒めが出てくる。西郷の「純粋な意志力」と「道徳的偉大さ」は内村を打った。西郷は「自国を健全な道徳的基盤の上に築こう」としたからである。内村や新渡戸の称揚した武士道が歴史的、現実的の武士道と何処まで合致するかは歴史家から提出される正当な問いではあるが、彼らの武士道と西郷論は読み継がれている。

ところで、西郷はロゴセラピーと何の関係があるのだろうか？この論文の著者はここで初めてロゴセラピーと武士道の間を問おうとするのではない。それはすでに始まっている。W・クルツはドイツ・ロゴセラピー協会と国際ロゴセラピー学会を組織したヨーロッパにおけるロゴセラピー研究の第一人者の1人だが、彼は『フォーカス (FOCUS)』誌 (53 / 2009 S.110 ~ S.111) に掲載された稲盛和夫の「私はいう、エゴを少し減らそう」という記事の写しを、彼

のそれに関する見解も添えてこの論文の著者へ送ってきた。稲盛はインタビューの中で、今日の世界的不況を導いたアメリカの経営者の一部が不況後、自国の助成を受けたにも拘らず、過度のボーナスを要求した自己中心性を批判した。さらに、一国の運命を担う人間はただ才能があるだけでは駄目であり、清廉潔白な性格を持たなければならないとした。さらにまたなぜ稲盛が禅寺での修業に入ったかとの問いに答えていった、「私は仕事を中断しようと思った…。われわれは非常に強く外面的な価値を追う。私は内面的なものを磨こうと欲した」と。物質的価値のみならず精神的なそれも追求する必要があると。最後に、2年間の雲水としての経験はいまいっそう「人間的に」彼の仕事を形成することに貢献するといった。すべてこのような稲盛の言葉と行為はロゴセラピーの中心テーマでもあるので、クルツはそれに注目したのだった。

稲盛和夫は経営論を西郷隆盛の「敬天愛人」という生き方の上に据えた。同名の小冊子²⁰⁾の中で「敬天愛人」の原理から「人の心」をベースにする経営「原理原則を貫く経営」「お客様のニーズにこたえる経営」「未来へ挑戦する創造的経営」「アメーバ経営と時間当たりの採算制度」など、彼の経営フィロソフィが出てくるとした。そればかりではない。稲盛はこのフィロソフィの「根底にあるもの」、すなわち「敬天愛人」の原理そのものを「人生の方程式」「心に描いた通りの現象が現れる」「思いやること」「動機善なりや、私心なかりしか」「世のため人のために尽くす」という順序で論じた。この論文の筆者は稲盛が経営論と原理論の区別と関係を理解していることは注目すべきと考える。稲盛和夫は2007年、『人生の王道』²¹⁾を書き、『南洲翁遺訓』を用いて彼の原理論を無私、試練、利他、大義、大計、覚悟、王道、真心、信念、立志、精進、希望という章立てで展開した。

稲盛は西郷の西南戦争という負の遺産を考慮しても、これらの概念が現代においても有効であると考えた。クルツが肯定的に稲盛に反応したことはこれらの概念が人間における精神的なものの働きの内容に対応することと関係する。この論文の著者の観察によると、実際、経営および経営コーチングおよびメンタリングにおいてフランクルの意味での精神的なものを顧慮することは今日広く必要不可欠なものとなさされ始めている。²²⁾

従来、キリスト教主義学校において「近代日本史とキリスト教」という科目を採用するとき、関心は正当にも明治期における日本人が諸外国からのキリスト教ミッションにどう反応したかという問いに向けられた。この反応の仕方には日本人が武士道を保存したことが含まれている。それは道徳体系であることによって同時に人間生活の物質及び経済面の建て方へ大きな影響を与えた。それは現在でもこの論文の著者が言及した例のように経営の原理論を提供している。しかも、それはロゴセラピーによる経営論と出会い、地球規模の協働が成り立つ可能性はある。この論文の著者はすでに「ドラッカーとフランクルは相乗効果を発揮する」²³⁾という論文の中で、ロゴセラピーによる経営論の輪郭の1部を示唆した。「近代日本史とキリスト教」が社会と経済と政治の立て方の展望も含むなら、このことは学生の社会力、人間力を強化するという点においておおいに役立つだろう。

8 ロゴセラピーと生命倫理と死生（ホスピス）論

生命倫理は医療技術が人間の誕生と死へ介入する際、介入の倫理性を判断するための学問である。死生（ホスピス）論は終末期患者の精神的苦痛の緩和を問題にする。ランドルフ・オックスマンはロゴセラピー&実存分析をメインツで教授するが、彼によるとフランクルは人間の実存における精神的なものの次元を顧慮する点で現代ホスピス運動の先駆者シシリー・ソン

ダースに影響を与えた。²⁴⁾ フランクルは同様にWHO専門委員会報告書804号²⁵⁾の成立にも影響を与えた。それはWHOが決定した政策ではなく、専門家の国際的なグループの見解であるが、日本の医療者に刺激を与えた。一部の医師たちは終末期がん患者が精神的苦痛を緩和し、良好な状態を保つよう援助される権利があるとした。

上の報告書によると、精神的側面での良好状態は「生きる意味や目的への関心や懸念とかかわっていることが多い」。それは終末期患者にとっては、「自らを許すこと、他の人々との和解、価値の確認などと関連していることが多い」。これら2つの引用におけるフランクルの影響は明らかである。「生きる意味や目的への関心」「許しの必要」「和解」と「価値の肯定」はフランクルの精神的なもののカテゴリーに属する概念である。フランクルもWHO専門委員会も精神的ケアが一方で宗教と重なる部分があることを認識する。精神的な良好状態は古来、宗教の目指すところだったからである。他方、フランクルもWHO専門委員会も、「精神面のケアは直ちに宗教上のケアと同一でないこと」を指摘する。この指摘は重要である。報告書によると、精神面でのケアのために宗教の助けを借りる場合、人は基本価値として国連の「宗教および信仰におけるすべての差別と不寛容の撤廃宣言」に示される精神的および宗教的多様性の尊重を重視すべきである。「すべての人間は思想、良心および宗教の自由を権利として持つ。この権利には、宗教あるいはいかなる信仰でも自ら選択できる自由、個人的にあるいは他の人々と共同して、密やかにあるいは公開の場で、自己の宗教ないし信仰を、礼拝、戒律の遵守、慣習的儀式、布教の形で表明する自由が含まれている」。それ故、精神的苦痛の緩和ケアにおいて「思想、良心および宗教の自由の権利」は保証しなければならない。宗教多元主義は遵守しなければならない。フランクルによると宗教はロゴセラピーの扱う対象にはなるが、ロゴセラピーの立場とはなり得ない。

精神的ニーズの評価判定に関してもフランクルとWHO専門委員会の見解は、患者の権利を尊重することにおいて一致する。「問いかけは優しく、患者自身が持つ価値観や信念を十分に尊重しながらおこない、同時に患者がこの問題について黙っていたい権利を持つことも尊重しなければならない」神についての患者の考え方を知るには、宗教や神が患者にどんな意味があるか問いかける。もし意味があると答えたら、簡単に話してもらう。希望や力の根源がどこにあるかに焦点を当て、「助けが必要なとき誰に求めますか」と質問することも精神的ケアに繋がる。フランクルもWHO専門委員会も「精神的なニーズの評価判定」に関して「患者の精神的信念と健康との間の関係」に焦点を当てることは良いという。

フランクルもWHO専門委員会も「精神的な面への援助と支援」に関して、患者が「精神的な面での体験を尊重され、これについての話を耳を傾けて聞いてもらえる」と期待する権利を持つという。両者はまた「精神的な面まで包含したケアにおける人間関係は心の癒しを促す力がある」という。そのようなケアは「人間の心と身体に積極的な治癒力を発揮する」とする。このような考えはまさしくフランクルの次元存在論の適用にほかならない。精神的苦痛の緩和ケアにおいては次元存在論の求める全体的人間が問題となっている。

ただ、この全体的人間がどの程度日本のホスピスケアの現状において顧慮されているかは今日なお問題である。医療技術の進歩により、これまでできなかった治療や延命ができるようになった反面、医者自身が生きる意味への問いを自分に課していないことが多い。終末期医療において実存的な問題が露呈する場合、医療者は無力感に陥り、患者に向き合えなくなる場合がある。患者が生きる意味への問いを医療者と話し合うことができればよいが、医療者側にその

準備ができていない状況がある。²⁶⁾ 生命倫理や死生論の授業を通してこの問題を扱うことはできる。その際、これらの学問にロゴセラピーを導入することによって学生は様々な技法を身につけることはできる。精神的苦痛を表現する言葉やしぐさを敏感に掴み、それを査定する訓練、共感することによってこの苦痛を緩和する技法、変えることのできない状況を乗り越えるために人間自身が自分を変えていくという態度変容、意味に満ちた仕方で終末期を過ごすための精神的資源を患者から引き出す方法、これらのことはすべてロゴセラピーの効能である。

結 び

この論文の著者は上にロゴセラピーの人間学を彼の担当する諸科目へ導入した場合、それらの科目の理解がどの部分でどのように変わったか、それらの科目のどの部分が改めて視野に入ったかも示唆することができた。そしてそれらの科目は独自の対象を持ちながらも相互に繋がって一体をなすることも示唆することができた。フランクルにおける精神的なものの捉え方は幅が広く、学際的教育の基盤となりえるだろう。人間心理学科の内部で担う人間諸科学系の諸科目を超えて総合人間科学部の他の学科における人間諸科学科目もロゴセラピーの人間学を基盤としながら再構成できる可能性もあり得る。また学生がロゴセラピーの人間学に裏打ちされた諸科目の展開を理解するなら、彼らは自らの生活の意味と価値と目標を見つけるよう促され、自己価値の感情を得ることができよう。他者との積極的な関係を築き、能力を伸ばすことができよう。学生は自分を良い人間であるとし、生きることを喜びと楽しみとして体験することも可能となるだろう。²⁷⁾ ロゴセラピーの人間学はこのようにして日本の学生の自尊感情の低さへの、自己表現を思うようにできない学生の背景にあるものへの、そしてセルフ・エスティームを高める要因への問いへ答えることができよう。²⁸⁾

(本稿は、尚綱学院大学短期大学研究規定に基づく2008年～2009年度共同研究「ロゴセラピーの人間学」の研究成果の一部である。)

注

- 1) Joerg Riemeyer, Die Logotherapie Viktor Frankls und ihre Weiterentwicklungen, S.177. Bern 2007
- 2) V・フランク、死と愛、(邦訳) 霜山徳爾 みすず書房 1957年
- 3) ロゴセラピーの人間学をできるだけその古典的な形態において伝えるために、注1のリーマイヤーの他、E.Lukas, Arzt und Philosoph, Viktor Frankl zum 100. Geburtstag München 2005; H.Raskob, logotherapie und existenzanalyse Viktor Frankls, Wien/New York 2005を参照にした。
- 4) 芝田豊彦は共同研究者であるが、V・E・フランクルにおける人間像と神 - 滝沢神学との比較 -、関西大学 文学論集 第59巻第4号のなかでこれを考察している。これも参照されたい。
- 5) Joerg Riemeyer, a.a.O. S.99
- 6) Karlheinz Biller/Maria de Lourdes Stiegeler, Woerterbuch von Viktor E.Frankl, Wien-Köln-Weimar 2008 S.395
- 7) 安井猛、ドラッカーとフランクルは相乗効果を発揮する、『文明とマネジメント』ドラッカー学会年報 2009173頁～177頁
- 8) V・フランク、夜と霧、(邦訳) 池田香代子 みすず書房 2005年 110頁
- 9) Manfred Oeming, Biblische Hermeneutik, eine Einführung, Darmstadt 1998
- 10) ロバート C・レスリー、イエスとロゴセラピー - 実存分析入門、(邦訳) 万代慎逸 ルガル社 1985年
- 11) V・フランク、夜と霧、同上 145頁
- 12) 安井猛、フランクルの強制収容所体験を貫く6本のラインについて、『滝沢克己を語る』、春風社、2010年 221頁～241頁、236頁～238頁
- 13) E. Lukas, a.a.O. S.117～S.132

- 14) Frankl/Lapide, Gottsuche und Sinnfrage, ein Gesprach, Gütersloh 2005 S.122 ~ S.123 ; Franz Mussner, Jesus von Nazareth im Umfeld Israels und der Urkirche, Wissenschaftliche Untersuchungen zum Neuen Testament 111, (Hg.) Michael Theobald, Tübingen 1999 ; Monotheismus Israels und christlicher Trinitätsglaube, (Hg.) Magnus Striet, Freiburg/Basel/Wien 2004
- 15) ビーター・ドラッカー、傍観者の時代、ダイヤモンド社 (邦訳) 上田惇生 2008年 iii 頁
- 16) スタッズ・ターケル、死について！原書房 (邦訳) 金原瑞人他 2003年 155頁、384頁
- 17) Frankl/Lapide, aa.O. S.129
- 18) 内村鑑三、代表的日本人、岩波文庫 2007年、13頁～49頁
- 19) 新渡戸稲造、武士道、岩波文庫 2007年、25頁～40頁
- 20) 稲盛和夫、敬天愛人、PHP文庫 2006年
- 21) 稲盛和夫、人生の王道、日経BP社、2007年
- 22) David Megginson & David Clatterbuck, further techniques for coaching and mentoring, Elsevier 2009 ; 安井猛、ロゴセラピーの人間学的仮説とコーチング／メンタリングの技法、尚綱学院大学紀要 第58集 2009年 120頁～122頁
- 23) 安井猛、ドラッカーとフランクルは相乗効果を発揮する、同上、168頁～181頁
- 24) Randolph Ochsmann, Die Sinnfrage in der letzten Lebensphase, in: Sinn in Zeiten der Resignation, (hrg.v.Wolfram Kurz u.a.) 2006 S.225 ~ S.241
- 25) 世界保健機関編 (邦訳) 武田文和『がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア』金原出版株式会社 1993年 ; Talcott Parsons, Death in the Western World, in: ENCYCLOPEDIA OF BIOETHICS 3rd EDITION, (ed. b.) Stephen G. Post, USA 2003, p.587 ~ p.593 ; Placing religion and spirituality in end-of-life care, JAMA Vol.284, No.19 (2000) p.2514 ~ p.2517 ; Spirituality in palliative care : Opportunity or burden ? Palliative Medicine Vol.16 No2 (2002) p.133 ~ p.139
- 26) 安井猛、共著、緩和ケア・カリキュラム提言、『医学教育』(Vol.39/Nr.5) 日本医学教育学会、333頁～339頁。このような認識は医療の現場からも報告されている。
- 27) ボグラルカ・ハディンガー、(邦訳) 安井猛、『生きることへ勇気づける - 子どもと青少年の自己価値の感情と人格性を強めるために』、日本教育振興センター 2008年
- 28) 安井猛、どのようにロゴセラピーはひきこもりを治せるのか？ 尚綱学院大学紀要 第56集、2008年 111頁～124頁；『児童心理』(2010/3 No. 910)、特集「自己肯定化感」を高める。金子書房、34頁～54頁；古荘純一、日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか、児童精神科医の現場報告、光文社新書 2009年